



シンポジウム
基調講演

変わりゆく世界の中の日中関係

高洪

(中国政治協商會議委員・中華日本学会会長)

司会の先生、ご紹介いただきましてありがとうございます。オンラインでご参加の皆様、会場の皆さま、こんにちは。

愛知大学国際中国学研究センターが主催されるオンラインシンポジウムに参加する機会を頂き、とても嬉しく思っております。愛知大学は、私が以前客員として教えたこともある学校でして、今回のシンポジウムにご招待いただき、また、第2部で「変わりゆく世界の中の日中関係」とのテーマで基調講演をさせていただき、同僚や友人の皆さまと交流や議論が出来ることは、私にとっても良い勉強の機会です。

今日の世界は、大きな発展と変化の中にあります。中国人の視点からみると、近年のこのような「天下汹汹(世界が騒然とするさま)」のなかで、昨年年末には15カ国が参加する地域的な包括的経済連携(RCEP)協定の調印、中国とヨーロッパの投資協定の完成等の良いニュースがあった一方、2021年1月6日にアメリカの議会で発生した世界を震撼させたニュースや、新型コロナウイルスが日本を含めた多数の国々で日ごとに蔓延していくという悪いニュースもありました。

変わりゆく世界の中で、今年(2021年)の日中関係はどうなるのか。それを解明するために、まず、2021年は中国と日本にとってどのような意義があるのかについて私の考えを申し述べたいと思います。皆様のご批評とご指摘をいただければ幸いです。

中国では、2021年は「二つの百年目標(中国共産党創立百周年、中華人民共和国建国百周年)」の第一段階です。中国共産党が、国家と国民の決然たる努力を指導する政権党として、また全国で約1億人いる、社会の各分野のエリートである党員を指導する強い政党として、この歴史的な里程碑を越えることの重要性は自明であります。内政と外交におけるその重要性もまた、言うまでもありません。世界的に言うと、過ぎ去った2020年(中国の旧暦の「庚子年」)は厄年でありました。不確実の話によると、去年にビル・ゲイツは「疫病は人間社会への警告である」と言いました。これは本当かどうか知りませんが、この言い方には弁証法的な考え方が含まれていると言えるでしょう。しかし、結局のところ厄年は厄年であって、良い年ではありません。もちろん、厄年に適切な対応をとることが出来、さらにそこから教訓を得られたなら、「転危為機(危機を転じて機会となす)」とすることができ、「禍を転じて福となす」こともできるでしょう。これもまた、弁証法的思考の結果であります。

歴史上の偶然かもしれませんが、中国では近代に入ってから、旧暦の「庚子年」のたびに災害が発生し、苦しめられて来ました。1840年にはアヘン戦争、1900年には八カ国連合軍の北京占領、1960年には深刻な自然災害と政策のミスの影響で、苦難に満ちた年になりました。しかし、近代の中国は、まさにこれらの困難の中で、徐々に活路を開いていったの

です。すなわち、末期の封建社会を終わらせ、民族の覚醒を促進させ、新しい国家として独立自主、自力更生の道を開きました。そして、今回の2020年の「庚子年」のなかで、中国政府は国民と心をつにし、文化の優位性と制度の優位性を発揮することによって、新型コロナウイルスの蔓延をコントロールし、疫病の流行拡大防止と生産再開を両立させるという困難を努力によって、世界の主要国の中で唯一 GDP のプラス成長を達成した国になりました。こうした成果を踏まえ、経験を蓄積し、国民の士気を鼓舞するとともに、自信を強めました。これらのことは、「禍を転じて福となした」ものであると言えるでしょう。このような「厄年有益論」は批判を受けるかもしれませんが、日本の皆様にとっては、危機を前向きにみるというのは理解しがたい態度ではないでしょう。日本社会では一般的に、「黒船事件」は日本の新時代の幕開けであったと認識されていることが、それを証明しています。

日本にとって、2021年にはどのような意義があるのでしょうか？ご列席の日本の代表者の方々は私より多くの発言権を持っていられると思います。しかし、私は日本の学術界のある見解に注目したいと思います。それは、「2021年から2045年にかけて、日本は次の歴史段階に入る」というものです。この見解は、東京大学の吉見俊哉教授の『大予言』という著書のなかで述べられているもので、彼は戦後日本の歴史を振り返り、1945～1970、1970～1995、1995～2020の各時期をそれぞれ「復興と成長」、「豊かさと安定」、「衰退と不安」という3つの歴史段階に分けています。もちろん、吉見俊哉先生の「25年歴史周期説」は、両親と子供の「世代間隔」に基づいて推算されたものです。また、日本の近世の中後期から戦後までを推算したものもあります。この理論と類似するものとして、20世

紀前半のロシアの経済学者による「コンドラチエフ循環理論」も、「25年歴史周期説」の一つです。この場では時間の制約がありますので、詳しくは説明致しません。

2021年の日本は新しい歴史の座標の上で、どこに向かって進んでいくのか、どのように進んでいくのか、どうやって進んでいけばよいのでしょうか？歴史を検証することが必要です。中日関係はそれぞれ新しい年に、どこに向かって進んでいくのか、どのように進んでいくのか、どうやって進んで行けばよいのかについては、歴史を検証することが必要であり、また、双方の努力いかににもかかっています。今日の会議は愛知大学国際中国学研究センターで行われるため、文学的・学術的な筆法で新年の中日関係をお話しさせていただきます。

ご周知のように、清朝末期の学者王国維の『人間詞話』は三首の宋词を引用して、学問の「三つの境界（心境）」について言及しています。すなわち、「昨夜西風凋碧樹。独上高楼，望尽天涯路。」¹（出所：晏殊の『蝶恋花・檻菊愁煙蘭泣露』）は第一の境界であり、「衣帶漸寬終不悔，為伊消得人憔悴」²（出所：柳永『蝶恋花・伫倚危樓風細細』）は第二の境界であり、「衆裏尋他千百度，驀然回首，那人却在，燈火闌珊處」³（出所：辛棄疾『青玉案・元夕』）は第三の境界です。実際には、王国維先生が提起したこの「三つの境界」というのは学問に限らず、『人間詞話』の中では、「古今を通じて、偉業（大事業）・大学問を成し遂げる立ち上げる人は、必ず経験する境界（心境）である」と指摘されています。

健全で安定した中日関係を発展させることは、もちろん「大事業」に属します。そのことは、中日両国あるいはアジア、ひいては世界的に言ってもあてはまります。戦後以来の日中関係は過去に「一人で高い楼閣を昇る」

という国交正常化を経験し、「服の帯がだんだんと緩んできて、痩せて憔悴する」という苦しい努力を重ねてきました。現在も様々な問題がありますが、皆さんが両国関係の成熟した健全かつ安定的な発展のためにたゆまず努力すれば、いつか「何気なく振り返る」時に、よい局面を迎えることができると信じています。

私の結論的な意見は三つあります。第一に、世界の不安定な変革が続いている背景のもと、中日関係には時代的価値と戦略的意味が含まれており、2021年にはさらに豊かな関係になるべきです。第二に、中日間には様々な騒動が起こっていますが、今後も相互理解と信頼を深め、歴史認識問題や島嶼の主権をめぐる紛争などに適切に対処し、その上で「ウィンウィンの関係」（互惠関係）を積極的に構築してゆくべきだと思います。第三に、より積極的な姿勢で手を携えて疫病に立ち向かい、グローバルなガバナンスに協力し、両国、アジア、ひいては全人類の「人類卫生健康共同体」を構築し、最終的には「人類運命共同体」の構築を達成していくことです。

また、もう一点ですが、中日両国の上層部が、「日中国交の正常化の50周年である2022年を契機に、中日関係を新たな段階に促進していく」ことを約束したということです。2021年は、そのために力を蓄え、不断に努力を重ね、少しずつ進めていく過程であり、何もしないで消極的に2022年を待ち続ける過程であってはなりません。これに対して、双方とも冷静な認識を保ち、積極的に実際の行動をとるべきです。

最後に、王国維先生の詩句を借りて、私の発言を終わらせていただきます。「試上高峰窺皓月，偶開天眼覷紅塵。可憐身是眼中人」⁴（『浣溪沙・山寺微茫』）。私たちはそれぞれの限界から脱出しようと努力し、広い視野・大局的な視点を持ち、高遠な理想的な目

標を抱いて、現実の中日関係を観察していくべきです。しかし残念なことに、（現段階では）双方はまだ現実から抜け出すことができず、あるいは、着実に障害を乗り越え、模索していくしかありません。この点について言えば、2021年の中日関係は「任重道遠（任務は重く、それを成し遂げる道ははるかに遠い）」であり、これに関連する努力も「未有窮期（尽きる時はない）」のであります。

ご清聴ありがとうございました。

脚注 *

- ¹ 原文訳：「昨夜の西風は強く吹いて、青々とした木の葉を落とさせる。一人で高い楼閣を昇って、空の果てへの道を見渡す。」。始めの心境とは、孤独な感じをよく体験することを意味する。
- ² 原文訳：「服の帯がだんだんと緩んできても後悔しない、君のために憔悴している」。痩せても、体が壊れても構わないように、諦めないで追求し続けるということを意味する。
- ³ 原文訳：「人混みのなか、幾度と無く探しまわったが、何気なく振り返ったところ、あの人が消えそうな薄い灯火のそう遠くない場所にいた」。中身は自ら現して、気づかないうちに納得して、運用するようにできることを意味する。
- ⁴ 原文訳：「私は高峰に登ってみて、空の月を覗いてみた。ふと目を開けて、騒がしい世の中を見ていた。これでやっと自分が可哀相だと気づいた。なんと自分もそれらの衆生の中の一人に属しているとわかった」。